

十二月の巻	420
自然再生論（前編）	420
自然再生論（後編）	429
検証	434
re-re-reset	446
十二月の巻 おまけ	457
スロウダウンな師走	457
くりすます近づく	461
それぞれのHoliday	469
微熱？ それとも	478
一月の巻	485
クリーンアップ初め	485
C&S&R	495
一月の巻 おまけ	503
アプローチ、ソリューション	503
ジレンマとその先（前編）	517
ジレンマとその先（後編）	523
距離	532
わたしたち	537

十二月というのは何も予定を入れないくらいが丁度いい、とは云うものの、これをやらな  
いと年を越せない、ということもある。河川事務所か、はたまた其処そこの課長か、どこの発  
案かはいざ知らず、ヨシ原や干瀉の保全のためとやらの再生工事の話が持ち上がった以来、  
どうにも落ち着かない日々が続いていた訳だが、今日は一つの決着を付ける待望の一日。セ  
ンターの御三方は朝からせわしなく、昼食もそこに切り上げる状態。会議スペースや受  
付の準備をしていると、助っ人スタッフとして、先週決まったばかりの新たな理事候補男女  
一名ずつ、それに前々からの役員さんで、例の課題論文「流域考察」で合格を得た理事候補  
がやって来た。この方、ご年配ながらフットワークは良く、地域事情通、そしてちょっとし  
た女流作家だったりする。論文が通らない道理がない。

「あ、玉野井のお婆様、いらっしやい」

「先生はまだ？」

文花と一言二言交わし始めた矢先、当の先生がゆっくりと現われた。今日から師走なれど、  
走るほどいそがしくはない先生である。

「よあ、緑のお婆さん、しさしぶりだなあ」

「ホホ、先週はごめんなさいね。三連休だったから、つい遠出しちゃってね」

お婆さんと言われても別に気を悪くすることなく、この通り余裕の返答ぶり。緑のお婆さ  
んてのが引つかかるが、何を隠そつ、お名前が緑さんだからである。特にペンネームはない  
ので、何かを書き著す時は、そのまま「玉野井 緑」で出している。同年代、かつ物書き同  
士、てことで、掃部のおじさんとは話が合つようだ。時は十三時、話を聞く会開会まではま  
だ三十分ある。

理事候補の顔ぶれが固まってきたところで、櫻も徐々に打ち解けてきた。新しい候補二人  
と、受付のセッティングなどを今はしている。千歳は先週同様、プロジェクト関係の調整に  
励む。河川事務所からは石島課長と、随行が一名いらっしやるそう、発表用資料はPCに  
入れ込んで来る旨、聞いている。配付用資料も当日持参だとかで、即ち事前には何の情報も  
ない、ということ。何らかの予備知識があった方が進行上は円滑なのだが、出たとこ勝負と  
いうのも大いに臨むところである。コーディネーター役を仰せつかった千歳は、柄にもなく  
武者震いしている様子。スクリーンに映し出すPCデスクトップ画面のピントがさつきから  
合いそつで合っていないのですぐわかる。

受付客第一号は、弟子のお嬢さんである。本日の役回りは言わずもがな、先生のアシストだが、少々気負いが見受けられる。受付表に名前を大きく書き過ぎて、

「あらら、小松 南になっちゃった」

「実が落ちちゃったって」

「十二月ですもんね、いろいろ落ちる・・・ って櫻さん、何よあ」

「エへへ、改めまして南実さん。あの私、何て言つか、お詫びしたいことがあって・・・」

「あ、だったら、私も」

受付でのほんの「コマなどと言っては不可<sup>い</sup>ない。実に実のある、奥深いやりとりなのである。だが、この続きは何だかんだで明日に繰り越されることになる。今日の会はそれだけ大波小波の何とやらだったのだ。

開会十五分前、聴講者がポツポツ来るのに混ざって、河川事務所の二人が現われた。資料をギリギリまで仕込んだ甲斐があったか、これでバツチリ然とした堂々たる登場ぶりである。

「やあやあ、掃部先生、今日はお手柔らかに頼みますよ」

「ま、ちゃんと出てきたんだから、感心感心。来たからには、いい話聞かせてくれる、ってことだよな？」

「今日の資料はちょっとした自信作でございます」

いつもなら平身低頭になるところ、今回は屹<sup>きつぱ</sup>然と応じている。お付きの人物は、受付に配付用資料などをセットしつつ、配り始めた。千歳は預かったPCをプロジェクトにつないで試験投影中。舞台は整いつつある。

この後、運営委員候補の男女二人、チーム冬木からも男女二人、十月の回の参加者なども集まり、開会定刻にはすでに三十余名に達していた。つまり会場はほぼ満席。

「皆さんこんにちは。今日から十二月。歳末ご多用のところ多くの方々にお越しいただき、ありがとうございます。」

司会進行役は、櫻が務める。いつもなら気の利いたフレーズの二つや三つも出るのだが、会の性格上、肅々とやっている。否、素顔の櫻に注ぐ会場の視線が妙に熱いもんだから、不覚にも硬直してしまった、ということらしい。こういつ時はさっさと開会挨拶に振ってしまっただ方がいい。

「・・・行政担当者から直接お話を聞く機会というのもそうそうないと思います。今日はまずお話を伺って、その是非を皆さんで考えてもらいながら、よりよい案などを見つけていければ、というのが趣旨です。単に『反対』とか『中止』とかじゃなくて、対案なり協働プランなりを出していただく、といった感じになりますかね。当センターとしては、ちょっと

硬派な催しですが、議論を通じて、体を温めてもらおうというのもございます。室温は予め低めにしておりますので、どうぞお気兼ねなく・・・」

文花も随分と挨拶慣れしたものである。室温設定について文句を言う客もこれなら出るまい。沸く客席に一礼して着席すると、櫻とアイコンタクト。

「あ、それでは早速、本日のお話『干潟とヨシ原の保全に向けた試み』について。石島課長、お願いします」 文花まで変な視線を送るもんだから、課長のプロフィール紹介がすっ飛んでしまった。ま、石島を知る人は、全体の三分の一はいるので、さしたる支障はなからう。

櫻が司会席に戻りかけた時、見慣れた青年が受付でウロウロしているのが目に入る。

「八宝さん、いらっしやい」

「へへ、毎度の遅刻、すみません」

「今ちょうど説明会が始まったところ。でも、席がねえ・・・ あ、受付に座っててもらえばいいんだ。二十分ばかりお願いしていい？」

櫻は先週と同じようにカウンターから会場とスクリーンを眺めることにした。時折、配付資料に目を落としては、静かに溜息。対照的に課長の方は息巻きながら熱弁している。

話の流れは概ね、一、荒川下流における自然再生の現況、二、その再生を妨げるゴミの実情、三、再生効果を上げつつある消波用造作物の紹介、そして、

「今、当の干潟と同じような箇所を調査しているところです。調査のモデルとして最初に指定させていただいたため、一部に人手が入ってしまいましたが、まだ工事が本決まりになった訳ではありません」

と弁解しながらも強気なことを仰る。「決まった訳ではないが、進める前提・・・」そんな言葉のウラが読み取れる。油断ならない。

今のところ機材係の干歳は、スクリーンを監視しながらも、配付資料に入念に赤入れしている。さらにその傍らでは普段は円卓にあるおなじみのノートPCを起動させ、議論になりそうなポイントを打ち込んだりしている。いつでも投影できるようにプレゼンソフトを使うあたりはさすがである。それにしても、立場上、中立じゃなきゃいけないというのが悩ましい。頭の中では、言いたいことが漂流・漂着し出している。

「で、今回の再生、つまり消波実験の要点は、次の三点にまとめられます」

1. 波からヨシ原を守る 2. 干潟の安全性を確保する 3. ゴミの漂着をできるだけ遮断する これらが箇条書きでスクリーンに映し出される。干歳はすかさずそれらを打ち直して、唸る。「漂着を遮断？」

単に話を聞いただけなら、ここで質疑応答が入って、おしまいになってしまうところだが、今回は違う。櫻があわてて駆け込んでくる。

「は、失礼しました。石島課長、どうもありがとうございます。では一旦休憩に入ります。14:10からは対話の時間、進行役は当センターの情報担当 隅田に代わります。よろしく願います」

プロジェクタをつなぎ替え、ワイヤレスマイクを点検し、赤入れ資料を読み返す。こういう状況だと、櫻も近寄り難いようで、何となく距離を置いている。南実としては話しかけに行くチャンスではあるが、やはり緊張感を保つように先生の隣でスタンバイモード。八広は何とか席を見つけて腰を下ろす。程なく会場は静まり、第二幕「対話」が始まる。

「この時が来るのを心待ちにされていた方も多いと聞きます。ここからは、対案・対話タイムです。私、隅田が進めさせていただきます」

特にツカミをどうこうするでもなく、千歳も無難な感じで切り出す。だが、期するものがあつたようで、次に面白いことを持ちかけた。

「早速ですが、現時点での意識調査をさせていただきます。工事の是非は又キにして、『消波』そのものの必要性を聞きたいと思います。必要だと思われる方は、石島さんのいらつしやる側へ、必要でないと思われる方は、その逆側へ。どちらとも言えない、という方は様子を見ながら両者の中間あたりに、それぞれお席を移動してもらえませんか」

スクリーンには、要と否とで矢印を振り分けた図が大写しになっている。なかなか手筈がいい。

「ご面倒かけました。ご意見を整理していく上で、目に見える形にしておこうと思いで…… 今のところ必要派の方が多いようですね。では、不要派の方からご質問なり対案を、と思いますが、一応、ポイントに沿って、ということをお願いしましょうかね」

第一幕で提示された三つのポイントが再度スクリーンに現われる。対案が出たところで、ここに書きなぞらえようという設定である。まずは、1. 波からヨシ原を守る について、不要派の挙手を求める。手が一斉に挙がるようなことがあればヒヤヒヤものだろうが、こういう時はえてして静かなものなので、多数派の石島課長は悠然と見守っている。

「では、ここは代表して、掃部さんをお願いしてよろしいでしょうか」

小さく手を挙げてはいたので、指名しやすかったのは確か。コーディネーター席の隣、スクリーンの直下に座ってもらい、一席持つてもらったことにした。

「結論から申しまして、1. については『波が来ても平気』、2. については『し湯は安

全を確保するためにある訳ではない』、ということです。3．はまた後で議論するとして、とにかく消波するには及ばない、というのが当方の見解であります」

対立構図を作るつもりはなかったが、乗っけから単純論法で「反対」が示されたようなものである。歩み寄りを促すつもりはないが、溝を埋めていく必要はある。コーディネーターの腕の見せ所だろう。千歳はひとまずスクリーン上に先生の言い分を書き足していく。

「で、石島さんにお尋ねしたいのは、法的根拠でございます。察するに自然再生推進法ってどこだとは思いますが」

まだまだ余裕の石島氏は軽く一言、「左様でございます」

「皆さん、ここで『推進法』のがクセ者な訳です。再生を推進するのはどういふことが工事の上塗りを押し進めるような名称だったのがそもそも間違ひ。自然を生かした川づくりと言いながら、コンクリの廃材を再利用したコンクリでもって、新たに護岸を作っちゃったなんて笑えない話もある。廃材利用＝環境配慮って勘違いがまかり通って、自然再生が自然再破壊になっちゃった。そんな不自然な例が後を絶たないんだそうです。とにかく新しく何かを造るっていう発想をどうにかしてほしい、ってのがあります」

ここで課長が拳手、千歳は前方に来るよう勧める。

「不適切例は重々承知しております。今回の実験は、あくまで多自然型のアプローチです。流域の粗朶そだや石を使って沈床を設け、それ自体が自然の一部になるように配慮しています。

ヨシ原、干潟、消波ブロックが一带となって、多様性を醸成することを目指そうと・・・」

「いやいや、それでも人工物には変わりはないさ。だいたい何であそこに設ける、し、必要があるのかが不透明。理由が後付けな感じがしてよ。つつか、場当たりのなんだよ。ま、バチ当たりと紙しと重えつてとこだな」

「対応が後手になったらなつたで、いろいろ仰るでしょ。早めに手を打つ、つてもあるんですよ」

「今まで知らなかったんだろ。急に何だよって話さ」

段々ヒートアップしてきて、これはこれで観衆としては見応えがあつていいのだが、調整役としては看過できない。

「ちょっと本旨から反れてきたようなので、1・2．について整理します。自然志向の造作物であることはわかりました。ただ、それが本当に自然にとっていいものなのかどうか、そこを突き詰める必要がある、そんなところでしょつか」

「これは小生の持論であります。基本的には自然に対しては余計なことはいししない。するなら最低限の手助け程度でいい。そして新たに何かを造ったり加えたりというのは避け、あるがまま、本来のままを活かす。そういうことだと思えます」

「本来の」は、十一月の回で画家の蒼葉からも出たフレーズ。そこをどう論破するかがポイントだったが、わかっていた割には詰めが甘かった課長である。反証する前に、千歳にひと区切り付けられてしまった。

「自然再生の本来的意義についての議論を深めたいと思います。ここらで質問などありませんでしたら、お願いします」

こういう展開だと、手も挙がりやすくなってくる。必要派からは、人が介在するレベルはどう見極めるのか、不要派からは、人為的に造った自然地もこの際見直した方がいいんじゃないか、両派からそれぞれ含蓄ある質疑が出された。千歳はそれらをさっさと打ち込んで、スクリーンに投じる。

「河川事務所としては、市民・住民の皆さんの声によって動くことが多いです。要望にお応えしていくのが優先なので、レベル等は設けておりません」

「そこだよ、お役所が何でも言うこと聞いてたら、御用聞きと同じじゃないか。これは要望を出す側にも問題があんのかも知れないが、何らかの原則を設けてそれに照らして対応するのが筋だと思う。小生の原則論は、あくまで自然の都合優先。人間のご都合で自然に手を出すつてのは邪道な訳さ。どっかでしっぺ返しを喰うのがオチよ。レベルつてことなら、自然が自力で回復するための最低線たるな。外来種をどかしたり、下草刈りしたり、そうそうゴミの除去もな」

一気呵成に畳み掛ける。だが、その次の問いについては、鷹揚な答えが返ってきた。

「ま、造つちまつたもんは仕方ない、という見方もあります。人為であつても自然は自然。長年経過すれば一定のシステムが出来上がつてるでしょうから、それをわざわざ壊すこともない。要するにそれを以って反省材料とするか、懲りずに続けるか、そこが分かれ目な訳ですわ」

課長は青白い顔になっていたが、これで少し回復した。メリハリの利いたトークは掃部節の真骨頂。だが、フンフンと頷く向きが多いと見るや、ここでズバツと持論の最たる部分を持って来る。

「造つては壊し、壊しては造り、そういう時代ではありません。自然再生を進めるのであれば、むしろ壊し放しでいい。人工物がなくなれば自然てのは勝手に再生するもんです。再生の名を借りた新たな施しは無用。自然の声に耳を、自然の都合に目を、です。これは地域・流域の皆さんにも言えることですがね」

早くもまとめのような話が出てしまった。ここで要否について意識調査をすると、要らない派があっさり増勢することだろう。あまりにも自明なので、千歳はあえてポイントの三つ目に話を向けることにした。

「さて、自然再生に際して障害になる漂流・漂着ゴミですが、消波ブロックがそれを防ぐというのはちょっとどうか、とも思います。進行役という立場上、意見を申し上げるのは憚られるのですが、再生工事を進めるためにゴミを引き合いに出しているような印象は否めません。自然再生論とはまた違った視点で、要否を問う必要を感じます。いかがでしょうか。」

「ここは先に石島課長が陳述を始める。

「先ほどの掃部さんの話を継ぐとすると、ゴミもあるがまま置いておくことになるのかと。最低線ということで人が除去する必要は説かれてましたが、漂着するものの中には流木や枯れ枝なんかもあります。人工物と自然物を選別する手間は馬鹿にならないでしょう。ならばいっそ、となる訳です。ゴミの流れ着く量が抑えられれば、干潟やヨシ原に棲む生き物にとっても快適でしょうし」

説得力があるような、そうでないような。だが、元来そういう役割のためのブロックでないことは明らか。後付け観が拭えない。

先生も大いに一言あるのだが、弟子がいち早く手を挙げた。

「それは異議アリです。漂流・漂着は自然の摂理。ゴミもこの際、流れ着いてもらっていないです。あるがままとは言っても、拾わなくていいとは言っていない。人が出したものが片付ける。それが最低ラインの手助けです。そもそも、目立つゴミが防げればそれでいいってことはありません。粒々、いや細かいプラスチックゴミなんかはブロックしきれないでしょう。生き物にとつて特に脅威になるのはそうした細かいゴミの方です。ブロックできないなら尚のこと要りません」

その道の研究員に実証的な発言をされては元も子もない。要る派にも援軍がいればいいのだが、これで益々分が悪くなって来た。

「な、石島さんよ、要は生き物全体の為にはどっちがいいかってことよ。し潟に到達する量は確かに減るだろうよ。でも、流した先はどうなのさ。東京湾、太平洋、ってほとんどゴミは流れてっちゃう。一部はどっかの海辺に流れ着くだろうけど、それならできるだけ発生源に近いところで回収した方がいい、って。違うかい？」

分が悪いことは承知しているので、ここはなだめるような口調で言っただけ。だが、それでは解決にならない。対案が求められる。

「対案ということではどうでしょう？ 流すのはNG、回収するのは大変、となるとどうすればゴミそのものを減らせるか、って話になりそうです」

クリーンアップの発起人とリーダーはこの催しの主催者側スタッフなので、ここぞというところでの発言ができないのが何とももどかしい。千歳としては「回収するのは大変だけど、慣れてしまえば・・・」というのが正直なところ。文花も現場で鍛えている以上、説得力あ

る発言は十分可能だろう。だが、やはり口を挟めない。

どっちつかずの席にいた緑のおば様の手が拳がった。これには千歳も意表を衝かれた。

「ちょっと話が変わっちゃうかも知れないけど、ゴミが流れてると魚なんかも迷惑よね。

ホラ、六月の講座で先生教えてくれたじゃない。ソウギヨだっけ？ あれが干潟に打ち上がっちゃうのも、実はゴミが原因だったりするんじゃない？」

先生はちゃんとその時と同じフリップを持って来ていたが、それは南実の隣に置いてある。気付いた弟子がパラパラめくって、その一枚を会場に示して見せる。照明をやや落としてあるのでハッキリは見えないが、文花もしかと凝視している。

「死因は水関係だとは思いますが、解剖してみないとわかりません。中から微細ゴミが見つかったら・・・ あ、ところでブロックがあると、大魚が打ち上がるのも止めちゃいませぬ。そしたら、鳥がついばみに来られない、かも」

「し潟は、食物連鎖の舞台だからなあ。不本意な死に方でも、それならまだ浮かばれるってもんよ。ま、魚なんかの為を思って、水の良し悪しにも神経尖らしてる国交省さんなんだから、やっぱりゴミを流して済ますてのは理屈に合わんわな。あの溶ける燈籠だって、水質汚染になるからってんで回収することにしてんだろ？」

「あ、ハイハイ。仰せの通りでございます。そこまで言われちゃ、しがたないです」

いつもの平謝り調になってきた石島のトーチャンである。「しがたない」と茶化するのが精一杯。

一言を有する八広がここでようやく口を開いた。千歳としては、待つてました、である。

「ゴミを減らす、つまり発生抑制策については、やはり河川事務所としても打つ手はあると思います。いわゆる美化清掃ってことではずっと続いてますし、ボランティアな活動で拾い集めたものについてのサポートもある。でも、それはあくまで対症療法。もっと踏み込んで、もっと遡って、出させないところに力を入れてほしいです。抑制というか予防すね」

「省庁横断型とか、自治体連携型とか、そういうのって難しいものなんでしょうか。海のゴミは基本法とかで動きが出てきましたけど、河川の方は今ひとつ見えない。水面や川底の清掃、不法投棄物の処理、そうした大規模な作業は勿論評価できるんですが、あくまで管轄する河川において、管轄者として、ですよ。それと並行、いや予防の方により重点を置けば、そうした作業も減らせる。そのためには、いろんな省庁や団体や市民と組んで、かと」南実がフォローする。さすが、nigata@メンバーですね。

「皆さん、ありがとうございます。ゴミを減らす話については、実際にどんなゴミがどれくらい、というのをお見せしながら改めて。より具体的に解決策を探る場を別途設けたいと思います。ということ、今回の実験の是非に話を戻します。今聞いていて思ったのは、こ

んなところですよ。どうでしょうね」

スクリーンには、木・林・森、それになぞらえる形で、干潟・川・海、と文字が並んでいる。「つまり、一部だけではなく全体、全体だけではなく一部。双方向から見ると、どこか一部だけ良くしても効果が上がらないのは明白でしょう。ゴミの対策も部分的ではなく、全体で。自然再生についても然り。総合的な視点で考えた時、今回の消波実験はどういう意味を持つのか・・・その辺の説明はいかがでしょうか、石島さん？」

「場当たり、思いつき、そんな風に思われても仕方ないですね。システム論はこもつともです。その観点、確かに欠落しておりました」

少々酷ではあるが、ここで改めて聴衆の意識を探ることにした。だが、休憩を挟みながら、とすることで、場の空気を緩めてみる。スクリーンには「5:55 再開」と投影された。

© renol ogger